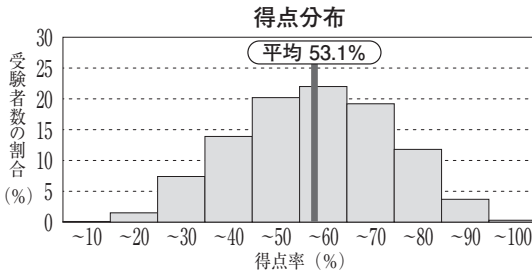
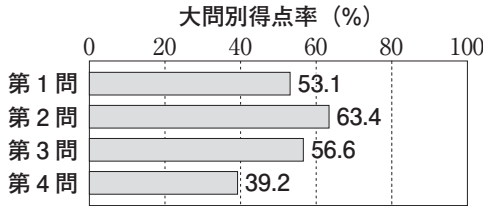


ここから、受験に向けた本格的な勉強を始めよう。高2生のうちに、基礎力を固めよう！

I. 全体講評

「第3回11月高2レベルマーク模試」の全体の平均点は、一〇六・二点であった。前回の同様の模試である「全国統一高校生テスト（高2生部門）」からは一カ月程しかたっていないので同様の結果ではあるが、三回程アップした。分野ごとに見ると、現代文については、ほぼ、



「全国統一高校生テスト（高2生部門）」と同様の結果であった。現段階としては問題がないが、欲をいえば評論も小説と同様の点数がとれることもっとよかった。評論は、本文に書かれていることを《論理的に読み解く》ことで、むしろ小説よりも得点しやすい文章である。残念ながら《論理的に読み解く》ことができず、評論の得点が伸びなかった諸君は、ここからそのことを意識して読むことを心がけよう。別に特別な読み方ではない。指示語・接続語を意識して前後関係をしっかりと把握する、筆者の主張しているところをきちんと押さえる、設問の選択肢で述べていることと本文をきちんと照らし合わせるなど、読解時の基本的な作業をきちんと実行していくことである。古典分野も、トータルでは「全国統一高校生テスト（高2生部門）」と同様の結果であるが、分野ごとに見ると古文が上がり、漢文が下がった。知識分野である古典の場合、重要知識が習得できていないと、それまでに身に付けた知識事項の出題であったかどうかで得点が上下しやすい。受験レベルの古文・漢文について、安定して得点するためにも、まずは、受験で必須とされる重要知識を早めに習得するようにしよう。今回、古文・漢文ができなかった諸君は勿論だが、得点できた諸君の中でも、古文の問1・問2、漢文の問1がで

きていない諸君は、他にたまたま、知っている知識事項が出たから得点できたのかもしれない。そのような諸君は、古文の古典文法、重要古語、漢文の句法・重要漢字について、この機会にしっかりと確認しておこう。これを習得できていないと、次回の成果は、知っている知識事項が問われるかどうか、運に任せるしかなくなる。基礎知識があることを前提に問題演習などで積み上げていくのが古典の勉強である。幸い覚えるべきことは英語などと比べて圧倒的に少ない。ぜひ、どこかで短期集中で知識事項を身につけるようにしよう。高2生は間もなく受験まで一年となる。ここから本格的な受験勉強をスタートすることになると思う。定期試験などで、「一夜漬け」の勉強を経験したことがある諸君もあろう。しかし、あわてて覚える一夜漬けの勉強は身につかないということとは承知しているだろうし、大学受験の勉強は範囲も量も多いので、それで乗り切ることではできないであろうことは想像がつくだろう。受験に必要な教科・科目数、そして、大学対策の量を考えればわかかるが、高3年生になってからではそれほど時間はない。そのことをよく肝に銘じて、高2生の今だからこそできる、基礎力を養う勉強を一日も早く始めよう。

II. 大問別分析

第1問 (評論)

段落の簡単なまとめをつくるなど、手を動かしながら文章を読もう！

第1問の得点率は五三・一％であった。

設問ごとに見ていくと、問1の漢字問題は、「遊(離)」―「遊(説)」の正答率が二二・〇％と低かった。漢字としてはどちらも易しいので、「ユウリ」「ユウゼイ」の意味がわからなかったようだ。評論文の中で意味のわからない熟語が出てきたら、その都度調べ癖をつけよう。

問2は三項の関係を整理しなくてはいけない設問で三八・八％と、正答率は低かった。センター試験の評論文では、単純な二項対立にとどまらない文章が多く出題される。「頭の中での整理」が難しい場合、積極的に手を動かして(「余白にメモをするなどして)整理してほしい。問3は、六〇・六％と、比較的高い正答率だったが、①を選んだ諸君が二一・八％と、少なからずいた。問4は、問2同様、三項の関係を整理する設問であるが、三五・〇％と正答率も低かった。手間はかかるが、手を動かし、自分なりに文章構造図を作成してみると、文章構造を把握する力が身につく。ぜひ、解説を片手にチャレンジしてもらいたい。問5は、写真を見て正答を選ぶ設問で、正答率は七五・四％と高かった。資料を見て解く問題がセンター試験でも出題される可能性があるので、間違えた受験者は、解説をよく読み次に備えてほしい。問6は、正答が③・⑤で、正答率はそれぞれ

四七・四％、三九・三％であった。誤答は④や⑥に集まった。(それぞれ三九・七％、三四・九％)。これらを選んでしまった諸君は、解説や解説授業できちんと確認しておこう。

なお、文章の展開を把握する力は一朝一夕につくものではない。段落ごとの簡単なまとめをつくるなど、手を動かしながら文章を読む訓練を繰り返してほしい。

第2問 (小説)

小説も本文根拠。想像しすぎないように注意しよう！

第2問の得点率は六三・四％で、上々の出来であった。問題文は、公園での主人公と老人とのやりとりというシンプルな設定で、文体もそれほど技巧を凝らしたものはなかったので、内容は掴みやすかったようだ。高二の二期という時期を考えるなら、まずは妥当な結果といえよう。

設問別に見ていくと、問1では(イ)の「寄る辺なさ」の正答率が四四・〇％と、かなり低かった。②の「漠然とした思いに囚われている」とした者も多い。「寄る」＝信頼を寄せるものに近づくというニュアンスを正確にとらえてほしい。

問2の正答率も五一・九％と比較的低かった。④と答えた諸君が二六・四％と比較的多かった。数行前に「地上に流れる鳥の影の美しさ」とあるが、これは簡単に言えば、「鳥の影は美しいから愛する」ということである。直前の「実態から静かに分離され抽象された」などの語句に惑わされないようにしよう。

問3は三行選択肢であったにもかかわらず、正答率は七六・七％とよくできていた。老人と主人公の心に空虚さがあるとすることをきちんととらえられたようだ。

問4は五九・九％の正答率で前問に比べれば、やや迷いがあったようだ。「人間的な面白み」が気になったのかもしれないが、「稚気と自負心と遊び心があふれていて、わたしはなんだかおかしかった」とあることに注意したい。誤答では④が多かったが、老人に意外な明るさがあったとして、「老人に対する評価を見直そう」とするまでにはやや飛躍がある。

問5も問3同様、三行選択肢であったが、正答率六七・〇％と、やはり好調である。本文での老人に対する主人公の心の動きを丁寧にたどっていけば、正解にたどりつく。その場合、やや誇張されているような語句があれば、それを外すことが一つの方法だ。

問6は表現に関する設問で、従来通り六つの選択肢から二つ選ぶ形式だ。最後の設問で、どちらか一つは正答率が低くなるのが常だが、今回の場合、③が六六・〇％、⑥が七一・七％といずれも高くなっており、読みの正確さがわかり、頼もしく思われた。誤答では②が多かったが、鳩が飛び立ち、羽ばたくときの不安感と老人への思いは直接にはつながらない。小説では、想像しすぎには注意しよう。

第3問 (古文)

夢と現実の区別、誰が何をどうしたのかを整理しよう！ 基礎事項の確認もしっかりとしよう！

『太平記』から、後醍醐天皇が楠木正成を暗示する夢を見る場面からの出題で、得点率は五六・六%と、よい結果であった。

問1の語句の解釈の問題で、(イ)は重要古語「つぶさに」と敬語「聞こしめす」の意味を問う問題で、どちらも六割前後の正答率であったが、(ウ)は反語「何事か」を疑問とした誤答が三割強あり、正答率は五割を切った。

問2は傍線部中の文法的説明の不適當な選択肢を選ぶ問題で、完了の個数が異なる④が正解だが、正答率は五割を切った。①・②の敬語の種類や本動詞・補助動詞の違いを間違えた誤答が合計約三割あり、敬語の学習が不足しているようである。今回、古文ができた諸君の中で、問1や問2が出来ていない諸君は、次の模試では、成績が下がる可能性がある。そうならないよう、重要単語と文法について、しっかりと確認しておこう。

問3は夢占いの結果を読み取るが、これは七割を超えてよくできていた。楠木正成が天皇退位の準備をしている敵方とした誤答が一割を超えていた。

問4は楠木正成を後醍醐天皇が呼んだ理由を問う問題で、これも七割を超えてよくできていた。①・④は夢の中に実際に正成が出て来てしまっており、南向きの木による暗示ではないし、③・⑤

は夢について触れられていない選択肢である。

問5は会話文の中から、楠木正成は武略では幕府軍にはかなわないが、智謀をもって戦えば勝てる」と考えていることを読み取る問題で、六割弱の正答率であった。誤答が一番多かったのは武力でも勝てるが知恵を用いればさらに良いとした④で、二割近かった。知恵が重要な点は良いが、現在の戦況を読み間違えている。

問6の内容合致問題は四割を切る正答率で誤答も分散した。後醍醐天皇が楠木正成に質問した内容が異なる④への誤答が二割と多く、夢占いをさせた律師を間違えた②への誤答も二割近かった。誰が何をどうしたのか、選択肢を吟味する際には注意しよう。

第4問 (漢文)

語彙・句法・詩の知識などを学習し、読解に生かして得点源を増やそう！

「虎の害」と題する諷刺詩と引用された太山婦の原話「礼記」からの出題である。得点率は三九・二%と大苦戦で、基礎問題も含め、漢文全体において学習不足がうかがえる。

問1は同じ意味と読みの語を選ぶ問題で、①は「如(ごとし)」で、②は「焉(これ)」であった。どちらも読みの重要語で、③は六割を超える正答率であったが、④は二割にとどまり、「安」「矣」への誤答が多かった。多義語であるので、ここでの用法を区別できるように知識を整理しよう。

問2は、漢詩の空欄補充は韻の問題であること

をまず疑うべきであったが、文脈から補って「人影」に誤答する解答が六割もあった。正答率は一割強であった。漢詩の知識を身に付け、これを機に問題の意図に気付けるようになろう。

問3は、反語でよく用いられる「豈」が、「豈に〜か」の形で疑問・推測を表しており、天地や社の神に虎の害から救ってほしいという心情を表している。誤答で最も多く四割近い選択率であったのは、助けてくれない・あてにできないというあきらめの選択肢④で、言い過ぎである。正答率は二割を切った。

問4は、諷刺詩が真に言いたい趣旨を問う問題で、正答率は五割を超えたが、諷刺ではなく虎の害や太守そのものの解答に留まった選択肢②・⑤への誤答が合計二割あった。漢文ではたとえや逸話や諷刺で、真に言いたい事を説明することが多いので、核となる主張を的確にとらえるようにしたい。

問5は返り点の付け方と書き下し文の問題で、使役「使」の句法を問う基本的な問題であるが、正答率は五割であった。傍線部にはポイントとなる句法があることが多く、身につければサーブス問題であり、一通りの句法の演習は必要である。誤答で二割と最も多かった④は、子路を「使つて」と動詞として読んでしまっている。

問6は内容説明の問題で、誰が誰にどのようなことを、というポイントを確認していくことになる。「夫子(孔子)が小子(弟子たち)に」で④・⑤に絞られるが、この時点で四割が誤答している。「夫子」は重要語である。ここまで絞られ

ば「苛政は虎よりも猛なり」の意味を答えればよいので正答率は五割近かった。読解にも語彙は用いるので、しっかりと学習をすすめたい。

Ⅲ. 学習アドバイス

読解に必要な知識の習得とともに、丁寧に読み、文中の根拠に基づいて考えて読解することを心がけよう！

センター試験の国語では高度な読解力が要求される。それにこたえるためには漢字や語彙、文法などの知識的なことを身に付けることが必須である。しかし、それと同時に、文章を読むとはどういうことか、国語の問題を解くとはどういうことか、についての理解と実践が必要である。これは知識と同様、一朝一夕に身につくものではない。今回この模擬試験を受け、解説等を読んで、根拠に基づく読解の大切さに改めて気づかされた生徒もいることだろう。現代文だけでなく、古文・漢文も含めたすべての分野において、そうした読みの姿勢の大切さを認識し、常にそれを意識して読解することを心がけよう。